

『オナラまで、愛して欲しくて、三千里』

小山正太

あらすじ

自分がだらしない性格故に、ダメな男しか愛せない女、吉高アユミ。そんな彼女は、収入が安定したイケメン、大森と付き合っていた。誰もが羨む状況ではあるが、大森が完璧である故に良い女で有り続けなければならぬ。いことにアユミはプレッシャーを感じていた。それでも大森の理想的な彼女になるべく、せめて彼と肩を並べられる職に就こうと就職活動に励むアユミ。だが上手くゆかず落ち込む。ダメな自分を励ましてくれる大森の優しさも辛い。

そこでアユミは、いけないことだと分かりつつ、元ヒモ彼氏の小室に会うことで不安を払拭しようとする。自分よりダメ人間の小室を見ることでアユミは安心しようとしていたのだ。

小室といると背伸びする必要が無くして落ち

つく。だが小室は新しくできた好きな子に夢中。それでも小室を追いかけようとするアユミ。そんな彼女を見て親友や母親は「大森君と付き合い続けなさい」と諭そうとする。加えてアユミの浮ついた心に気付いた大森が、焦ってプロポーズまでしてくる。本当は嬉しはずなのに、アユミは心から喜ばずにいた。大森と結婚して良き妻になるために背伸びしてまで頑張るか。小室との恋を実らせヒモ気質の彼を養ってゆくか。どっちにしても頑張らなくてはならない未来しか見えず、アユミは結論を出せずにいた。

しかし時間は待ってくれない。優柔不断なアユミを見兼ねた大森からは別れを告げられ、慰めてもらおうと近づいた小室には酷いフレ方をする。

「男なんてクソくらえ」と、アユミは就職活動に本腰を入れる。だが、志望している会社に、小室もエントリーしていた。採用予定

1名のその会社の最終面接で、アユミは小室に内定を譲ろうとしてしまう。

小室としては自分の幸せを全て捧げてしま
う。大切なものまで小室に譲ろうとした自分
にある種の恐怖心を抱き、アユミは、だめん
ず・うおーかを卒業する。

登場人物

吉高アユミ(25)・・・就職浪人してまで入社できた大手広告会社を辞め、またも就職活動中。自分がだらしないため、基本的にダメ男しか愛せない。

小室洋介(25)・・・アユミの大学時代付き合っていた元ヒモ彼氏。夢追い人で、だらしがない性格。アユミからは『ニヤンニヤン』と呼ばれていた。

大森健吾(28)・・・アユミの今カレ。大手飲料メーカーに勤めるイケメン。完璧人間であるため、アユミにとっては居心地が悪い彼氏。

高井真希(25)・・・大手出版社に勤務するジブリ好きの女。アユミと小室の大学時代の

同級生で、同じ学祭実行委員に所属していた。

美帆（22）・・・小室が恋焦がれている魔性の女。就職浪人中。

成瀬（21）・・・ヤキモチ焼きの美帆ちゃん
のイケメン彼氏。

吉高貴子（48）・・・アユミの母。夫は愛人
を作って逃げてしまった。

社長（58）・・・芸能プロダクション『浅田
企画』の社長。

○ アユミのアパート・リビング(夜)

静寂の中、時計の針の音が室内に響く。
タンスの上には男性用腕時計と置時計

(時刻はアナログ、日付はデジタル表記)。
ベッドの上には2人の男女。

吉高アユミ(25)と大森健吾(28)。

アユミは大森を横目でチラリ。

アユミ、高鳴る鼓動を抑えるように

アユミ「ふう……」

アユミ、意を決して、オナラを「プツ」。

大森、天井を見つめたまま固まる。

アユミ「ごめ……」

大森、一瞬驚くが

大森「ごめん、オレだ」

と苦笑いでフォロー。

アユミはすすり泣き

アユミ「私だってオナラくらいするもん」

大森「ごめん……」

アユミ、置時計に目をやる。

デジタル表示は「2013/12/09」

涙がにじんで表示がぼやけてゆく。

○ 回想・アユミのアパート・リビング(夜)

アユミの声「だいぶ溜まってるねえ」

時計の日付は「2011/12/01」。

アユミは小室洋介(当時23)にひざ枕
耳かきをしてあげている。

アユミ「ニヤンニヤン。耳掃除はマメにしな
きゃダメでしょ」

小室「わかったニヤーン」

アユミ、ブヘツと思わずオナラ。

小室「くっせえ(笑う)」

アユミもつられて笑う。

耳かき続行。

小室「この部屋出ようと思うんだ」

アユミ「へ？」

小室「僕ら、別れた方がいいのかなって」

アユミ。思わずメン棒をぶすり。

小室「イタッ！」

アユミ「オナラのせい？」

小室「それはいつもじゃない」

アユミ「そっか」

小室「このままじゃいけないと思う」

アユミ「なんで？」

小室「2人とも就職先決まってないし」

○ 回想あけ・アユミのパート・玄関(夜)

アユミ、靴を履く大森の背中を見つめる。

大森「今日は突然押し掛けてゴメン。それじゃあ」

アユミ「あのさ、私なんか大森くんはもっ
たいないと……思うんだよね」

大森「会社辞めたこと、まだ気にしてる？」

大森、フツと笑顔でアユミを抱きしめる。

大森「アユちゃんならすぐ決まるって」

アユミ「うん……」

大森「明日面接の練習だっけ？ モーニング
コールは」

アユミ「(首を横にふり) いいよ」

大森「そうだね、アユちゃんなら大丈夫か」

アユミの頭をポンポンと撫で、大森は出てゆく。

アユミ「アユちゃんなら大丈夫……か」

アユミ、タメ息。

○ 同・リビング(夜)

仄暗い室内でアユミはスマホをいじる。

電話帳、「小室ニヤン介♥」をプッシュ。

電話の声「この番号は現在使われておりません……」

アユミ、置時計を見つめる。

○ 回想・レストラン(夜)

クリスマスの装飾がされた店内。

他の客もいるのに、小室はもらった財布を掲げてハシヤグ。

小室「これ欲しかったヤツ」

アユミ「よかった」

小室「僕からはね……」

小室が渡したのは現在もアユミの部屋に

ある置時計。

アユミの笑顔はスッと消える。

小室「アユは腕時計つけるの嫌いだから」

アユミ「そう……だけど、だからって置時計」

小室「アユは寝坊ばっかだから」

小室の笑顔を見て、アユミも微笑む。

○ 回想あけ・アユミのアパート・リビング(夜)

アユミ、置き時計を抱きしめ涙をこぼす。

アユミ「私、全然大丈夫な子じゃないよお」

それでも、時計の針は時間を刻む。

○ タイトル

「オナラまで、愛して欲しくて、三千里」

○ 喫茶店(翌日)

高井真希(25)と対座中のアユミ。

真希「志望動機は？」

アユミ「御社の小説を子供の頃から……」

真希「小室君が小説家志望だからでしょ」

アユミ「違うよ」

真希「彼、フェイスブックに小説アップして
たよね」

アユミ「どう思った？」

真希「チョー………つまらなかった」

アユミ「そっか……」

真希「なんでキミが落ち込むわけ。もう関係
ない人でしょ」

アユミ「わかってるよ」

真希「電博堂を辞めたのは」

アユミ「激務だったから」

真希「小室君がコピーライター諦めたから」

アユミ「それも……ちよびり」

真希「大森君と吊り合う人間になりたいから、
せめて再就職したいんですよ」

アユミ「そうだけど……」

真希「バカすぎるよ。大森君の方がイケメン
だし、何より収入が安定してる」

アユミ「わかってるよ」

真希「小室君と結婚して幸せになれると思

う？」

アユミ「……」

真希「女は男よりもタイムリミット早いんだからね」

○ パチンコ屋前

アユミ『one more time one more chance

(山崎まさよし)』を歌いながらパチンコ屋

の前をウロウロ。

アユミ「歌い」いつでも、さーがしているよ、どっかにきーみの姿を……」

小室がうつむいて店から出てくる。

アユミ「やっぱりここにいたか」

小室、アユミに気付いて逃げ出す。

アユミ、小室を追いかけ、捕獲。

○ ファミレス

テーブル席にアユミと小室。

小室「あの……多分吉高さんはですね」

アユミ「なんで名字？　なんで敬語？」

小室「別れたし」

アユミ「で、続きは？」

小室「アユはパチンコ感覚なんだよ」

アユミ「出た、分からない例え話」

小室「当たり前出るまでやめられないパチンコ

台と同じ目で僕を見てる」

アユミ「はい？」

小室「いつか奢ってもらった分返すから」

アユミ「この前計算したら合計50万だった」

小室「あ、新入文学賞の賞金額と一緒に」

アユミ、通りがかりの店員に伝票渡し

アユミ「お会計お願いします」

小室「(うつむき)こちそうさまです……」

○ ファミレス前(夕)

アユミと小室、店から出てくる。

アユミ「大体洋介にお金に関しての期待なんてできるわけないでしょ」

小室「(立ち止まり)ではお元気で」

アユミ「どうせ予定もお金も無いでしょ」

小室「あるもん」

小室、プリプリしながら去ってゆく。

アユミ、小室のお尻を見つめ

アユミ「(ニヤニヤし) だらしないお尻」

アユミ、小室を尾行し始める。

○ 駅前(夜)

アユミが遠巻きに小室を見つめていると

アユミ「ん？」

小室は美帆(22)の前で立ち止まり、

一緒に歩き始める。

アユミ「オナゴだっ！？」

○ バー(夜)

サングラスをかけてカウンター席に座っ

ているアユミと真希。テーブル席にいる

小室と美帆の会話に聞き耳を立てている。

真希「私、キミが思うほど暇じゃないよ」

アユミ「彼氏いないし、会社に友達いないで

しょ」

真希「ぶっ叩いていいかな？」

アユミ「シッ！ 声大きい」

テーブル席。

小室「美人だし、人柄いいし。面接なんて5秒で決まるから、美帆ちゃんなら大丈夫」

カウンター席。

アユミ「私が教えた5秒理論」

真希「提供元、私ね」

テーブル席。

美帆「就職浪人してるし、不安です」

小室「大丈夫。オレの元カノ、就浪なのに電博堂内定したから」

カウンター席。

アユミ「私を使って励ますな」

テーブル席。

美帆「なんか勇氣出てきました」

小室「まあエントリーシートの子エックくらいしかしてあげられないけど」

美帆「だいぶ助かってます」

小室「オレ、エントリーシートで落ちた記憶

ないからなあ」

美帆「すごい」

カウンター席。

アユミ「私が洋介の書いてましたけどね」

真希「それはそれですごいな」

テーブル席。

美帆「あ、そろそろ帰らないと」

小室「えっ、もう？」

カウンター席。

真希「脈ナシ決定」

アユミ「ざまあみろ！」

テーブル席。

美帆、白々しくカバンを漁り

美帆「財布、財布……」

小室「いいよ、ここ出すよ」

カウンター席。

アユミ「はあっ!？」

小室と美帆、レジへ。

真希「あの男が払うなんて。完全敗北ですな」

アユミ「(美帆見て)あの子、見覚えはない？」

真希「さ、さあ……」

アユミ「大森君の会社に彼女募集中の人いる
ってさ。真希に紹介しよっかな……」

真希「美帆ちゃん。私たちが四年の時の一年。

学祭委員で一緒だった」

アユミ、支払い中の小室の財布見て

アユミ「あっ！」

真希、退店する美帆をジッと見て

真希「若いよね、ムカつくよね」

アユミ「(笑顔で)洋介、私があげた財布、ま
だ使ってくれてた」

真希「重症だ。説教部屋行き決定」

○ 真希のマンション(夜)

ジブリグッズでいっぱいのリビング。

真希の声「どう？ 社会人の力！ 残業代の

賜物！」

ベランダにいるアユミと真希。

真希は5階の高さから人々を見おろし

真希「人がゴミのようだ」

アユミ「この高さじゃ、下に聞こえるよ」

真希「海が聞こえる？」

アユミ「なんかウザっ」

真希「ウザいのはキミ。早く大森君に気持ち移して。ここで出会ってもう一年だよ」

アユミ「ジブリ好きのパーティーだっけ？」

真希「ジブリ好きを称した」

アユミ「女好きの男が集まり」

真希「パーティーを称した」

アユミ「ただの合コン」

2人、笑う。

真希「付き合って半年。思い出ぼろぼろでしようが」

アユミ「そうなんだけどね……」

アユミ、リビングの方を見てタメ息。

アユミ「大森君の前では出会った時の良い

子のままでいなきゃだから、辛いんだ」

真希「いいじゃん。そうやって良き妻、良き

母になってゆくんだ」

アユミ「私は真希みたいに強くありません」

真希「だらしない男といて、汚いオバハンになってもいいの？ 紀伊国屋とかでベビーカー転がしたいでしょ？」

アユミ「貧乏だって楽しいもん」

真希「どこが」

アユミ「髪の毛切ってあげたりとか」

真希「学生だったから楽しいの。25歳。就職も結婚のチャンスもゆるやかな下り坂へ。

キミは今分岐点にいるんだよ」

アユミ「わかってるよ」

真希「付き合って4年＋2年。6年間も当たらないパチンコ台に座ってんじやねえ」

アユミ「思い出はプライスレス」

真希「あるわけねえだろ、そんなもん！」

アユミ「帰宅る」

真希「帰宅れ、帰宅れ！」

アユミ、リビングを通り抜けて玄関へ。

真希「面接は5秒で決まる。ウジウジで覇気のない今のアンタはウチに採用されない」

アユミ、「ウー」と唸り、出てゆく。

真希 「バカたれ……（タメ息）」

○ アパート前(夜)

颯爽と歩き、アパートへ入るアユミ。

○ アユミのアパート・玄関(夜)

ドアを閉めると、アユミは泣き出す。

突然、「ハッピーバースデー」の歌が聞こえ、リビングと玄関をつなぐドアが開く。

× × ×

フラッシュ。

ハッピーバースデーの歌を歌いながら小室が登場。

手にはコンビニで売っているグラタン。グラタンにはロウソクが刺さっている。

× × ×

アユミ 「ニャンニャン……」

ドアが開き、出てきたのは大森。

アユミの笑顔がスッと消える。

大森の手には立派なホールケーキ。

大森「本当は昨日お祝いしてあげたかったけど、アユちゃん泣いてたから」

大森、ケーキを置き、アユミにカルティエの腕時計を巻いてあげる。

アユミ、泣きながら大森に抱きつく。

アユミ「(ボソツと)わたし……ズルい……」

大森「へ？」

アユミ「なんでもない」

○ 同・浴室(夜)

アユミ、シャワーを浴びている。

○ 同・リビング(夜)

ベッドに座ってる大森。

固定電話に目をやると「留守電」のボタ
ンがチカチカ点滅。

大森はドアの方を見て、シャワーの音を
確認してから、留守電ボタンを押す。

留守電の声「アユミ、お母さんです」

×

×

×

タオルを身体に巻いたアユミがリビングに入ってくる。

大森、急にアユミに抱きつく。

大森「結婚しよう」

アユミ「へっ!？」

○ 同・玄関(翌朝)

大森、靴を履いて部屋を出てゆく。

アユミ、「いつてらっしゃい」と手を振る。

大森が去るとパタパタとリビングへ。

○ 同・リビング

アユミ、固定電話の前でうなだれる。

アユミ「これのせいか……」

留守電の声「就職も決まらないし、いいお相手もないんですよ? 三月までに働き口見つからなかったらこっちに帰ってきなさい。お見合い相手くらい紹介……」

アユミ、ボタンをプッシュし、切る。

○ 高級スーパー（イメージは紀伊国屋）

アユミ、店内をブラブラ歩く。

アユミの声「結婚って……早すぎない？」

× × ×

フラッシュ。

アユミのアパート。

大森「ウチの母親は25で僕を産んだけど」

アユミ「そうじゃなくて、付き合ってたまだ半

年なんだよ」

大森「準備とか、お金貯めたら一年はかかる

よ。子供も早めに産みたいでしょ」

アユミ「そうだけど」

大森「取りあえずご両親に付き合ってる報告

だけでも。ね？」

× × ×

フラッシュあけ。

アユミ、一房「¥498」のバナナの値

札を見て

アユミ「高っ！」

品の良いお子様が、バナナを持って母親

の元へ。

お子様「バナナもってきたー」

母親「えらいねー。ありがとうー」

アユミ、品の良い親子を見つめる。

○ 普通のスーパー

アユミ、「¥168」のバナナを買い物カ

ゴに入れ

アユミ「これが普通だよ」

アユミの視線の先、寝グセをつけた子供
がリンゴを落として割ってしまった。

アユミ「あーあー」

母親が子供に駆け寄りひっぱたく。

泣いてる子供を抱え、母親はイソイソと
逃げ出す。

アユミ「(ボソツと)代金払えよ……」

○ アパート前

アユミ、買い物袋を持って歩いている。

アユミ「大森君と結婚……子供、私立の小学

校に入りたいしなあ……。(首ふり)なんと
不純な動機」

アユミ、アパートに入り、共同ポストを
開く。

アユミ「うわ、うわわ……」

公共料金やチラシの束がゴッソリ。

アユミ「ん？」

その中から一枚のハガキを手取る。

ハガキの表題は「明法大学学園祭実行委
員OB・OGの皆様」。

○ 居酒屋・広めの個室(日かわって・夜)

30名くらいの学生がいる座敷の個室。

隅っこのテーブルにアユミと真希。

真希、アユミの腕時計を見て

真希「かわいいな、カルティエ」

アユミ、離れたテーブルにいる美帆を見
つめて

アユミ「かわいいな、美帆ちゃん」

美帆は男たちに囲まれ、イチャイチャと

ボデイタッチの応酬。

真希「若い、ウザい、ビッチ」

アユミと真希の元に、成瀬（21）がビールを注ぎにくる。

成瀬「ご無沙汰してます、先輩」

真希「（ビール注がれ）あーどもども」

アユミ「ごめんね、空気読まずに来ちゃって」

成瀬「先輩方なら嬉しいです」

アユミ「『なら』？」

成瀬「ゆっくりしていきってくださいね」

成瀬、アユミにビールを注いで、去ってゆく。

真希「若い、イケメン、好き」

アユミ「卒業生私たちだけって恥ずかしいね」

真希「キミが来たいって言ったんじゃない」

ザワついた室内、静まり返る。

個室の入口で小室が突っ立っている。

皆、「どうも」と言いながらも、ぎこちなく苦笑い。

真希「色んな意味で恥ずかしい人だ」

成瀬は小室をにらみつけている。
アユミは、それを不安そうに見つめる。

○ 別の居酒屋(夜)

二次会であるためか、人数は半減。

アユミ、真希、小室は同じテーブル。

真希「小室君って今何してるの？」

小室「えつと……小説とか少々」

真希「どのくらい稼いでんの？」

小室「まだ、お金とかは……」

真希「稼いでないなら趣味だよね、それ」

アユミ「真希」

聞き耳を立てていた成瀬が立ち上がり

成瀬「あの。小室先輩は働いてないのに美帆

に就活のアドバイスしたんですか？」

美帆「ナル君やめて」

成瀬「アドバイスもらってから面接通らなく

なっただじゃん」

美帆「私が悪いんだって」

アユミ「小室君だって、面接通ったことくら

いならあるし」

美帆「そうですね。エントリーも落ちたことないんですよ？」

小室「そう……です」

真希「小室君のエントリーシート書いたの、アユミでしょ」

美帆「そうだったんですか!？」

小室「えっと、その……」

焦った小室はアユミの腕時計を指さし空笑い。

小室「腕時計嫌いじゃなかったっけ？」

真希、小室にビールをぶっかける。

真希「買ってあげられなかった奴がうるさい」
アユミ「ちょっと」

真希「困った時はアユミ頼み。変わらないね、キミは」

真希、腕時計をつかんで見せて

真希「キミの現実逃避の結果がコレだから」

小室「えっと……言ってることがよくわからないんですが、帰ります」

小室、コート持つて居酒屋から出てゆく。
アユミは追おうとするが、真希に腕をつかまれる。

アユミ、手を振りほどこき店から出てゆく。
真希、立ち上がり外に向かつて

真希「バカヤロー！」
皆、呆然。

真希「あつ、あ……今日はお姉さんのオゴリ
だぞ☆」

皆、盛り上がる。

真希、小室がいた席に置かれたクリアア
ッグを発見。

中を見ると企業のパンフレット。

真希「浅田企画……芸能プロダクション？」
ちよつと間を置いて

真希「あつ、就活か」

○ 歓楽街(夜)

速足の小室の後ろをアユミが歩く。

小室「ついてこないでよ」

アユミ、手を伸ばし小室の頭を撫でる。

アユミ「よしよし」

今にも泣き出しそうな小室を抱きしめる。

アユミ「つらかったね」

小室、アユミにしがみつき泣き出す。

○ 駅のホーム(夜)

アユミ、小室の手を引いて歩く。

小室「さむい」

アユミ、自分の手袋を渡す。

小室は黙って手袋をつける。

2人、手を繋いだまま立ち止まる。

○ アユミのアパート・リビング(夜)

ベッドの上、アユミは小室を膝枕。

小室「ハア、落ち着く」

アユミ「でしょ」

小室「(起きあがり)別れたんだからこんなの
よくない！」

アユミ、小室の頭をギュッと挿んで膝に

置き直す。

小室「あー、ダメになる」

アユミ「元々ダメでしょ」

小室「違うんだよ。なんかこう、寂しい気持ち
ちが筆を走らせるというか」

アユミ「そのリビドーはわかるけどさ」

小室「リビドー……って何？」

アユミ「小説……書いてるんだよね」

沈黙。

アユミ、プツと吹き出し笑いだす。

アユミ「洋介といると色んなことがどうでも
よくなる」

小室「それ、よくないじゃん」

アユミ「いいことだよ」

アユミは小室を抱きしめて寝ころぶ。

アユミ「時間に追い詰められてる感覚、しず
まる。コレ食べさせてあげたいとか、その
ためにバイトしなきゃとか、考えてるうち
に時間が過ぎて……ラク」

小室「僕は何もしてあげられてないのに」

アユミ「一緒にいてくれるだけでいい」

小室「就職してとか言わない？」

アユミ「うん」

小室「バイトしてとか言わない？」

アユミ「えっ？ あ……うん」

小室「お金返してって言わない？」

アユミ「あれ？ えっと……うん……」

小室「アユウ」

アユミ「ニヤンニヤン」

小室「ニヤーン」

突然、ドアが開き

大森「アユちゃん」

大森が入ってくる。

小室、即座にベッドから転げ落ち

小室「ニヤーン、から、ピツとするオレ！」

小室、ピンと立ち上がる。

小室「……てな一発ギャグを考えました」

アユミ「なんでやねーん」

空気が静まりかえる。

大森「誰……ですか？」

アユミと小室、かたまる。

置時計、電池が切れてアナログが点滅。

秒針は力なく右往左往。

×

×

×

アユミと小室、大森の前で正座。

大森「元カレさん……なんですね」

小室「いや、でも、今は何もないんですよ」

大森「わかってます」

小室「へ？」

大森「アユミのこと、信じてるんで」

大森、爽やかな笑顔。

小室「そうですか……あ、僕お邪魔ですよね」

大森「そんなことはありません。一度お話しした

いと思っっていたんです」

小室、立ち上がろうとするが座り直す。

大森、「そうだ」と言いながら名刺を出し

大森「名乗り遅れました。大森です」

小室、名刺を見て目をパツと開く。

小室「(媚びた笑顔で) 大手じゃないですか」

大森「いやいや、しがない飲料メーカーです」

小室「いやあ、今名刺切らせてまして……」

大森「何をされてるんですか？」

小室「一応、ライター……みたいな」

大森、ニヤツとした後に柔らかな笑顔で

大森「へえ、スゴいですね」

小室「(白々しく) そうだ、明日までに入稿し

なきやいけない原稿あったんだー」

大森「終電ないですよ」

小室「タ、タクシーで。そ、それでは」

小室、バタバタと部屋を出てゆく。

アユミ「ちよつと」

アユミ、立ち上がろうとするが大森を見て座り直す。(それを2、3度繰り返す)

大森「行ってあげなよ」

アユミ「いいの？」

大森「お友達は大切にしなきゃ」

アユミ「そう……だね」

アユミ、部屋を出てゆく。

大森の笑顔がスツと消える。

○ パート前(夜)

アユミ「待ってよ」

アユミ、小室の腕をつかむ。

小室は立ち止まり、黙りこむ。

アユミ「洋介？」

小室、急に高笑い。

小室「マジ超ウケるんですけどっ」

アユミ「は？」

小室「何、あの爽やかさ。『耳をすませば』の

聖司くんかと思っただよ

アユミの肩に手を置き

小室「いい彼氏見つけたじゃん。グッジョブ！」

立ち去ろうとする小室。

腕を引っ張るアユミ。

アユミ「待ってってば！」

小室「バカだよー。せっかくのイケメン、

エリートだよ。それにつけて優しいときた

もんだ。十分幸せ、未来のセレブ。君天才！

ではでは下流男子は消えます」

まだアユミは腕を引っ張る。

アユミ「私がそんな理由で人を好きになると
思うの？」

小室「あーそうだね！ 僕だってあんな風にな
りたかったけども……」

振り返ると、アユミが涙をポロポロ。

小室「ごめん……」

○ アユミのアパート・リビング(夜)

窓の外、アユミと小室を見ている大森。

カーテンをピシヤツと閉めベッドに座る。

○ 公園(夜)

ベンチに並んで座っているアユミと小室。

小室は大森の名刺を眺め

小室「彼、下ネタとか言わないんだろうな」

アユミ「マンゴーとかウコンを使う製品の会

議はワクワクするんだって」

小室「意外と下衆」

アユミ「そんなわけないじゃん」

小室「やっぱり」

アユミ、立ち上がって

アユミ「だからダメなの」

小室「よくわからん。良い彼氏さんなのに」

○ アユミのアパート・リビング(夜)

ベッドに座っている大森。

大森「良い彼氏……良い彼氏なんだオレは」

足をガタガタ貧乏ぶるい。

大森、カバンから『女が求める男1000の条件』という本を取り出し、パラパラめくる。

大森「1000って多いんだよ！」

本を床に叩きつける。

大森「優しくしてたらつけ上がりやがって」

固定電話が鳴る。

出るか、出ないか、電話の前を行ったり来たりして迷う大森。

大森「アユちゃんだよな」

大森、電話に出て

大森「もしもし、アユちゃん！？ 電話だっ

たらケータイの方に」

電話の声「あの…：アユミの母です」

大森「し、失礼しました！ えっと、僕は怪

しい者ではなくてです…：」

大森、ニヤリとし

大森「アユミさんとお付き合いさせていただ
いている者です」

×

×

×

朝。

寝ているアユミが目を覚ます。

台所から物音が聞こえ、跳ね起きる。

○ 同・玄関(通路にキッチンが併設)

ドアを開けると、スーツ姿の大森が料理
をしている。

大森「おはよ」

アユミ「何してんの？」

大森、じゃがいもを切り

大森「料理。今日面接だから精をつけてもら
おうと思って」

アユミ「そうだ、面接か」

大森「ちゃんとアユちゃんの予定もスケジュールリングしてるんだ」

大森、味噌汁にじゃがいもをブチこむ。

大森「じゃがいもの味噌汁、好きなんですよ？」

アユミ「うん。……あれ？」

大森「前に言ってたじゃん」

アユミ「そうだっけ？」

大森「なんでも知ってる。アユちゃんのことなら、なんでも」

○ 集談館(出版社)・外観

青みがかったガラス張りのビル。

○ 同・小会議室(面接控室)

就活生たちが並んで座っている。

その中にアユミ。

美帆の声「あれ？ アユミ先輩」

顔を上げると美帆がいる。

アユミ「美帆ちゃん……」

美帆「となりいいですか？」

アユミ「あ、うん」

美帆、隣に座る。

美帆「昨日はスミマセンでした。ナル君ヤキモチ焼きでいつも大変で」

アユミ「そうなんだ」

美帆「あー、でも全部私が悪いんだよな」

アユミ「そんなことは」

美帆「私が小室さんに変な期待させちゃったのかもしれないし」

アユミの笑顔がスッと消える。

試験官が入って来て。

試験官「受験番号208、橘美帆さん」

美帆「(立ち上がり) はい」

アユミ「頑張っってね」

試験官「受験番号212、吉高アユミさん。

お二人はBブースに行って下さい」

アユミ「はい。……えっ!？」

○ 同・編集室(面接会場)

衝立で8つほどの面接ブースが特設。

面接官2名の前に、並んで座っているアユミと美帆。

アユミは自己PR中の美帆に見とれる。

キレイな瞳、通った鼻筋、白くて小ぶりの歯。

アユミはうつむいてしまう。

○ 喫茶店(日かわって)

アユミは真希の前で突っ伏している。

真希「キミじゃなくて美帆ちゃんが内定したの、なんでだと思う？」

アユミ「若いから？」

真希「それもあるし、キレイだから」

アユミ「そんなバツサリと」

真希「キレイって顔じゃないんだよ。自分を磨く勇氣だから」

アユミ「(顔を上げ) 勇氣？」

真希「美帆ちゃんは成瀬君みたいなちゃんとしたイケメンと付き合うことを恐れてない」

真希、浅田企画のパンフレットを渡す。
真希「女になれないなら、男に勝て」

○ アユミのアパート(日かわって)

アユミは浅田企画のホームページを見て
アユミ「芸能事務所。また激務だなあ」
固定電話が着信。

○ 駅前

アユミ、ポケットに手を入れて歩く。
アユミ(独り言)来るなら事前に言えっつー
の……」

アユミは着物姿の貴子(48)を発見。
アユミ「なぜ着物……」
速足で貴子に近づいてゆくが、貴子の隣
に大森がいることに気付き

アユミ「え、なんで……」
アユミはUターンしようとするが……
大森「アユちゃん！」
振り返ると大森がニッコリ。

アユミも苦笑いで手を振る。

○ ホテル・レストラン

テーブルには、アユミ、大森、貴子。

貴子「こんな素敵な人がいたなんて、ね」

アユミ「……」

貴子「この子ったら家ではよくしゃべるんですけど。良い子ぶってるのかしら」

大森「実は、今後もお付き合いしてゆくか、定かでないんです」

貴子「あらあら」

大森「これからジツクリ決めてゆきます。ただし、御迷惑はおかけしないよう、ダラダラした関係にはなりません」

貴子「もつたいない。大森さんみたいな方だったら。ねえ」

アユミ「……」

貴子「父親がどうしようもない人だったから。この子、優しくされるの慣れてないのかも」
テーブルの下。

アユミ、貴子のスネを蹴る。

貴子は笑顔を崩さず蹴り返す。

アユミ、白ワインをイツキに飲み干す。

○ ビル街

アユミと大森、並んで歩く。

大森「いいお母さんだね」

アユミ「どこが」

大森「上品だし、持ち上げ上手」

アユミ「家ではオナラもゲップもするよ」

大森「似ないものだね」

アユミ「似てるよ」

大森「御謙遜を」

アユミ、立ち止まり

アユミ「大森君って女兄弟いないでしょ」

大森「いないけど」

アユミ「今さら何でこんな質問させてるの？」

大森「へ？」

アユミ「てか何で大森君？ 『君』付けだよ」

大森「普通じゃない？」

アユミ「全然。大森君って、告られて付き合
うのに、突然フラれちゃうタイプだよね？
絶対」

大森「確かに。告白したの、アユちゃんが初
めてかも」

アユミ『初めて』出た出た。女は初めてとか
特別って言葉に弱いって『100条件』に
のってたよね」

大森の笑顔、スッと消える。

アユミ「マニュアル本もひくし、勝手に母親
とコンタクトとってたのにもドンびき。冬
彦さんかと思ったよ」

大森「……」

アユミ「冬彦さん知らないか。テレビとかあ
んま見ないんだっけ？ 昔、佐野史郎が」

大森、アユミをビンタ。

アユミ「うそ……」

大森「もうオレに関わらないでくれ」

大森、去ってゆく。

アユミ「アンタみたいな野郎がDV男として

朝のワイドショーで取りあげられんだ！」

アユミ、大森とは反対方向に歩き出す。

突然、後ろから押され手をついて転ぶ。

振り返ると大森。

大森「お前のせいでノーマスだったオレの人生が台無しだよ。バーカ！」

大森、走って逃げてゆく。

アユミ「どーなってるのっ!？」

○ パチンコ屋前

アユミ、頬を抑えてヨタヨタと歩いている。パチンコ屋前で立ち止まるが

アユミ「ダメダメ」

過ぎ去るものの、Uターンで戻ってくる。

予想通り、小室が出てくる。

アユミ「やっぱりいた。あれ？」

なぜか小室はスーツ姿。

アユミ「なんでスーツ……」

○ 大きめの公園(夕)

缶ビールを飲みながら、ボール遊びをしている親子をベンチから眺めているアユミと小室。

小室「新人賞、ダメだった」

アユミ「それで就活か」

小室「昔はさ、年収一億円超えて、満員電車に乗らない人生になると思ってたけど」

アユミ「そのお花畑みたいな頭の中を直さないと、満員電車にも乗れないと思いますが」
幼児がヨチヨチ走ってきて、小室にボールを渡してくる。

小室「ありがと。(アユミに)子供には好かれんだよな、昔から。児童文学でも書こうかな」

アユミ、突然小室にキス。

「すいません」と駆け寄ってきた幼児の父親立ち止まってしまう。

幼児も目を見開いて硬直。

アユミ「アットホームダッドになればいいじゃん(ゲップ)」

小室、持っていたボールをポトリ落とす。

○ ラブホテル・部屋(夜)

アユミ、小室の手を引いて入室。

小室「(キムタク風に) ちょっと待てよ」

アユミ「そういう小ネタいらない」

アユミは小室をベッドに押し倒す。

小室「ダメだつて」

アユミ「ごはん奢ったでしょ」

小室「でもさあ……」

アユミ「美帆ちゃんだったらいいわけ？」

小室、ちよつと考えて、ニヤリ。

アユミ「なんでニヤつとした？ どうして美

帆ちゃんならOKなの」

小室「じらされるんだよ」

アユミ「そういうことか」

小室「絶対考えてること違うからね」

アユミ「じゃあどういふこと」

小室「簡単にやらせてくれないのがいい」

アユミ「私がビッチみたいじゃん」

小室「僕とは会って初日だった」

アユミ「それは好きになったからで……」

小室「感謝できないのって辛い」

アユミ「え？」

小室「ご飯食べさせてもらったり、プレゼン

トもらったり。本当は嬉しいはずなのに喜
べない自分が嫌になる」

アユミ「やることと関係ないじゃん」

小室「関係ある。人間は葛藤を求めてる！」

アユミ「意味わからない……」

アユミ、小室をポカポカ叩き

アユミ「意味わからないよ！ 自分だけわか
って満足だから小説も面白くないんだよ」

小室「……」

アユミ「ごめん、もうヒドイこと言わない」

小室「……」

アユミ「簡単にやらないから」

小室「時間は巻き戻らないよ」

小室、財布から4000円出し、部屋か
ら去ってゆく。

アユミ「キツチリ半額……」

×

×

×

アユミ、室内にあるカラオケ機で、『カブトムシ（aikō）』を泣きながら熱唱。

○ 雑居ビル・外観（日かwatて）

「浅田企画」と窓にプリントされた雑居ビルが映る。

○ 浅田企画・会議室内

面接官1名の前に、アユミが座っている。

面接官「マネージャーになったら、恋愛する

ヒマなくなるけど、大丈夫？」

アユミ「はい！ 男とか、どうでもいいです」

アユミの表情は清々しい。

○ 雑居ビル前

ほくほく顔のアユミが出てくる。

アユミ「面接通過は間違いないな」

小さくガッツポーズをするアユミ、『面接

対策マニュアル』を読みながら歩いている小室とすれ違う。

アユミ「えっ？」

小室は浅田企画の雑居ビルへと入ってゆく。

○ 真希のマンション・リビング(夜)

真希、映画を観ていると、「ドン、ドン！」

と、ドアを叩かれる音がする。

おそる、おそる、ドアを開けるとアユミが立っている。

真希「なに？」

アユミ「洋介が受けるって知っててあの会社

紹介したんでしょ」

真希「そうだよ。それだけ？」

アユミ「爆破しに来た」

アユミの手には季節外れの花火。

× × ×

ベランダで線香花火をしている2人。

真希「愛と憎しみは紙一重じゃん」

アユミ「憎んでないもん」

真希「憎んでる。メールに電話、大森がしつこくしてきたらどう思う？」

アユミ「怖い……」

真希「しつこくすることで、小室君を困らせたいんだよ。心のどこかで」

アユミ「そんなつもりじゃないもん」

真希「浅田企画、採用予定は一名だっけ？」

真希、自分の火の玉を、アユミの玉にくっつけて奪う。

アユミ「あっ」

真希「あのヒモ男、蹴落としてやれ」

火の玉、線香花火から落ちてゆく。

真希「絶対スツキリする」

○ 浅田企画・通路(日かわって)

矢印の下に「面接会場」と書かれた看板がある。

○ 同・会議室(面接会場)

4つほどの長机をロの字型に組み合わせ
て、向かい合って話し合いができるよう
になっている会議室。

アユミが入ると、小室だけがポツンと席
に座っている。

小室は座って自分のエントリーシートを
集中して読み返している。

志望動機の覧は汚い文字でビッシリ埋ま
っている。

アユミ「それでよく最終まで残ったね」

小室、アユミがいることに驚き過ぎてイ
スから転倒。

アユミ『端的に』。就活の基本でしょ」

× × ×

アユミと小室、並んで座って沈黙中。

アユミ「絶対内定もらって、アンタを落とす
から」

小室「はい……」

再び沈黙。

小室「面接官、遅いね」

アユミ「呼んでくる」

アユミ、立ち上がる。

○ 同・オフィス

社員たちが忙しそうに電話対応。

アユミ、オフィスから出てゆこうとする

女性社員に

アユミ「あの」

女性社員「はい？」

アユミ「面接に来た者ですが……」

女性社員、ホワイトボード見て

女性社員「あちゃあ」

女性社員、ケータイで談笑中の社長

(58) に駆け寄って

女性社員「社長、社長」

社長「(電話切り) なんだよ」

女性社員「面接」

社長は「あーっ」と声を上げ、アユミに

何度も頭を下げる。

アユミ、その姿を見てクスツと笑う。

○ 同・会議室(面接会場)

社長、アユミと小室の前に座る。

社長はエントリーシートに目を通し

社長「あつ、二人同じ大学じゃないか」

アユミ「そうみたいですわね……」

社長「もしかして知り合い？」

アユミ「(首を傾げながら)さ、さあ」

社長、エントリーシートをよく読んで

社長「自己PR、二人とも学祭委員のこと書いてるね」

アユミ「そうです、知り合いです。(小声で)

今、思い出しました……」

社長「じゃあ他己PRといこう」

アユミ「タコ？」

社長「お互いがお互いを紹介してみてくださいよ」

アユミ「へっ!？」

社長「じゃあ小室君から吉高さんの良い所を教えてください」

小室「え、えっと……」

小室は黙りこんでしまう。

アユミ、小室を心配そうに見つめ

アユミ「無いなら無理しなくても……」

小室「いっぱいあり過ぎて、一言では表現でき
ません。端的でなくてもいいですか？」

社長「どうぞ」

小室「あと、僕、吉高さんの元カレを知って
ます。彼から聞いた話でもよろしいでしょ
うか？」

アユミ「ちよつと！」

社長「吉高さんが良ければ構わないよ」

アユミ「……構いません」

小室「その元カレくんなんですけど、とても
ダメな人間でして」

社長、笑う。

小室「ギャンブル好きで、いつもお金が無く
て。クリスマスの日も1000円しか無く
て、パチンコで吉高さんのプレゼント代を
稼ごうとしたらしいんです」

○ 小室の回想・パチンコ屋

小室、「お願いします」と拝み、千円札をパチンコ台に投入する。

× × ×

小室のパチンコ台は大当たり連チャン中。

小室の声「せっかく当たったのに……」

小室「まだまだいける」

× × ×

小室の背後に積み重なっていた箱が無くなり、残り一つに。

小室、その箱のパチンコ玉まで使おうとするが、掛け時計『18:58』を見て

仰天。

小室「やば……」

小室の声「当たった玉ほとんど使い切って、デートに遅刻までして」

小走りでカウンターに箱を持って行き

小室「換金で」

小室、景品のショーカーに置かれた置時計を見つけて。

小室「(時計指さし)やっぱアレください」

○ 回想あけ・会議室

小室「残り少ない玉を使って、安物の置時計を吉高さんにプレゼントしたそうです」

アユミ「え！？ あれ、パチンコの景品……」

小室「そうらしいよ」

アユミ、机の下で小室の足を踏みつける。

社長「だめんずうおーかーってヤツだ」

アユミ「……(うつむく)」

小室「(微笑んで)そんなプレゼントでも吉高さんは喜んでくれたそうです」

○ 小室の回想・レストラン(夜)

クリスマスの装飾がされた店内。

小室の声「あと吉高さんは元カレのことをカ

ッコ良くいさせてくれた」

小室、伝票を見て固まっている。

アユミ「どうせ出せないでしょ」

アユミ、小室に一万円を渡し

アユミ「店員さんには洋介が出して」

小室の声「お金は吉高さんが出してるのに、
支払いは毎回元カレ君にさせてあげていた
そうです」

アユミ、置時計を抱え、笑顔を見せる。

○ 回想あけ・会議室

小室「何でも与えてくれる。お返しできない
んじゃないかって怖くなる。感謝よりも恐
怖心が先立つ。でも、ずっと感謝していた
い。だから、彼は吉高さんとの別れを選び
ました」

○ 小室の回想・アユミのアパート(夜)

置時計の日付は「2011/12/0
1」。

アユミは小室にひざ枕耳かきをしてあげ
ている。

小室の視点。テーブルに置かれた二枚の
エントリースhirtに目をやる。

小室のシートは完成しているのに、アユミのシートはまだ書きかけである。

小室の声「与えられたままで、何もあげられないのなら……」

アユミ「ニヤンニヤン。耳掃除はマメにしなきゃダメでしょ」

小室「わかったニヤーン」

アユミ、ブヘッと思わずオナラ。

小室「くっせえ（笑う）」

アユミもつられて笑う。

小室の声「せめて彼女の足を引っ張らないように自分は消えよう」

アユミ、耳かき続行。

小室「この部屋出ようと思うんだ」

アユミ「へ？」

小室「僕ら、別れた方がいいのかなって」

小室の声「寂しくなっても、彼女に会わないようにと、元カレ君は決意したそうです」

○ 回想あけ・会議室

社長、小室の発言を聞きながらメモをとっている。

小室「吉高さんみたいな素敵な女性なかなか
いません。好きだからこそ別れなきやと思
える子は生涯、吉高さん以外に出会わない
だろうと、元カレ君は言っていました」

メモをとっていた社長、顔を上げると、
アユミも小室もポロポロ涙をこぼして
いる。

社長「ええっ!？」

女性社員が「失礼します」と入って来て、
社長の前にお茶を置く。アユミと小室に
もお茶を出そうとするが、二人が泣いて
いることに気付く。

女性社員「社長！ 何言っただんですか!？」

社長「違うんだ。これは……」

社長が弁明している間、アユミと小室が
会話をする。

アユミ「今さらズルいよ」

小室「ゴメン……他に思いつかなくて」

アユミ「パチンコって一回のアタリでいくらもらえるの？」

小室「50000円、くらい」

アユミ「50万払って50000円。安いけど、

もういいよ」

小室「へ？」

アユミ「ちゃんと働いて、次付き合う子は幸せにすんだよ」

アユミ、涙を拭い

アユミ「一生私に感謝して、生涯忘れないでね」

社長の弁明は終わり、女性社員は部屋を出てゆく。

社長「えーっと、では……」

アユミ「さえぎって）私はズルい女なんです」

社長「いきなりどうした!？」

アユミ「元カレ君は私のこと美化してくれましたが、私は自分に自信が無かったからイケメンとか頭の良い人好きになれなくて……。ダメな彼氏に尽くすことで『自分

だってできる子じゃん』と思ったかったです。レジで支払いさせていたのも彼のメンツを保ちたいからではなく、『彼氏に貢いでて可哀そうな子』って思われなくなっただけなんです。こんなプライド高い人間が平身低頭にタレントのマネージャーなんてできません」

小室「そんなことありません！」

アユミ「アンタは黙ってて」

小室「すみません……」

アユミ「仕返しに、彼の元カノから聞いた話をしてもよろしいでしょうか？」

小室・社長「ど、どうぞ……」

アユミ「小室君って忍耐強いんです」

○ 回想・アユミのアパート(夜)

小室がアユミに膝枕してあげている。

アユミ「真希がね、私のことだらしないって言うんだよ」

アユミの愚痴を小室は頭を撫でながら

聞く。

アユミの声「相談に対して、『こうしろ』あ
あしろ』って言わず、黙って聞いててくれ
る」

アユミ「それでね」

アユミ、思わずオナラをしてしまう。

アユミ「ち、ちがうのこれは」

小室もオナラをして

小室「僕ら似た物同士だね。付き合っちゃお
うか」

と、笑う。

アユミの声「オナラをしたって嫌いにならな
いでくれた」

○ 回想あけ・会議室

アユミ「だらしない元カノだったのに……」

アユミ、小室を見つめた後

アユミ「ちゃんと感謝していてくれた」

小室「……」

アユミ「彼ならタレントの愚痴も悩みも聞い

てあげられます。私よりも御社にふさわしい人材だと思います」

アユミ、清々しい笑顔を見せる。

○ 雑居ビル前(夕)

アユミと小室、ビルから出てくる。

小室「もう一回面接してもらおう」

アユミ「タイムマシンがあつたらね」

小室「でも」

アユミ「洋介といると自分を幸せにできないと改めてわかりました。バイバイ」

アユミ、微笑んで去ってゆく。

アユミ「かっこいいじゃん、私」

小室、叫んで

小室「アユと出会えて本当によかった」

アユミ、立ち止まらずにボソツと

アユミ「気付くの遅いんだよ」

アユミ、こらえていた涙をポロポロ。

それでも立ち止まらず、歩く、歩く。

ケータイが着信。

歩きながら出て

アユミ「もしもし」

アユミ、立ち止まってハツとした表情。

○ 浅田企画・オフィス(日かわって)

アユミの声「なんで私なんですか!？」

アユミは社長席の前に立つ。

社長「僕を呼びにきてくれたから」

アユミ「試したんですか？」

社長「秘密」

アユミ「私、マネージャーに向いてないって」

社長「だから最初は社長秘書」

アユミ「へっ!？」

社長、立ち上がる。

社長「じゃあ現場付き合っ。そのうちタレ

ントにもついてもらうから」

アユミ「結局マネージャー。それに今日から

働くなんて聞いてません」

社長「なんのため私服で呼んだと思ってるの」

歩き出す社長。

忘れられたカバンを見て

アユミ「社長、カバン忘れてます」

アユミ、カバンを持って社長の後を追う。

○ 真希のマンション(日かわって)

アユミ、テーブルに突っ伏し

アユミ「働き過ぎで死ぬ」

真希「死ぬ死ぬ。どうせ死なんから」

アユミ「どうしてウチの社長もタレントも、

だらしのないのかな」

真希「それ、小室君と付き合ってた時と同じ

愚痴」

アユミ「言っていないよ」

真希「言ってた」

アユミ「……」

真希「私はウジウジ作家。キミはダメ人間引

っ張るのが上手」

アユミ「そうなのかな……」

真希「そういえば、小室君も就職先見つかつ

たらしいね」

アユミ「顔を上げ）そうなの！？」

真希「フェイスブック見てない？」

アユミ「あれ？ 見てないや」

真希「結局、愛じゃない。大学時代のあり余

った時間を小室君で解消してただけだった

んだよ、キミは」

アユミ、腑に落ちない表情。

○ タクシー内（日かわって）

着物姿のアユミと貴子。

貴子「あんたバカよ。大森君逃して」

アユミ「うるさい」

貴子「東京にいて、アンタみたいな仕事して

ても大丈夫な男性見つけるの苦労したのよ」

アユミ「で、どんな人？」

貴子「確かブラック企業に勤めてるって」

アユミ「はあっ？」

貴子「変わった名前前の会社があるもんね」

アユミ「……」

しばし沈黙。

貴子「ねえ？」

アユミ「うん？」

貴子「お父さんが愛人と逃げたせい？」

アユミ「なにが？」

貴子「アンタが結婚したくないの」

アユミ「関係ないって」

貴子「あの時は、私、包丁振り回したりした

けど今は元気よ」

アユミ「今は恋人がいるからでしょ？」

貴子「違う。愛せなくなった相手に、別れ告

げるのも、ある意味愛なのかなって、今は

思うの」

アユミ「(タメ息)『別れてあげる』なんて、

男の詭弁だよ」

アユミ、窓の外を眺める。

○ ホテル・お見合い用の部屋

お見合中。

苦い表情のアユミ。

隣には母。

目の前には、メガネの男と立会人のオツサン。

メガネはソワソワしてハンカチで脂汗を拭う。

アユミ「(ボソツと) 5秒で決まるなあ」

オツサン「まあこんな子ですが、仕事には一生懸命で。(男に) おい、何か質問」

メガネ「ご趣……」

メガネ、プウツとオナラをしてしまう。

空気は凍りつき、シシオドシの音が響く。

アユミ、プツと吹き出す(笑いを)。

次第に大笑いに。

メガネ「す、スイマセン！」

アユミ「私もたまに出ちやいます」

貴子「こ、この子ったら」

オツサン「若い人の感覚はわかりませんなあ」

苦笑いする年配者をよそに、アユミとメ

ガネの男は見つめ合い、微笑み合う。

〈 f i n 〉